

ひがし げ と

東海道遺跡（第2次）発掘調査報告

1997・3

三重県埋蔵文化財センター



図版Ⅰ 阿児町国府地区航空写真（伊勢新聞社提供）

撮影 1983（昭和58）年

序

近年、三重県はもとより全国各地から貴重な埋蔵文化財発見のニュースが多数聞かれるようになりました。中には歴史を書き換えるような大発見で、全国民の注目となるものもあり、年々、関心の度合いを増しております。

何故このように多数、埋蔵文化財発見の報が届くようになったのかを考えてみれば、それは、広大な面積のは場整備事業や道路の新設・改良あるいは河川改修などの公共事業、また、民間企業による開発事業などに伴う発掘調査增加の結果に外なりません。これらの事業が、経済の活性化あるいは国民の生活向上のため必要不可欠であることは言うまでもありません。しかし、発掘調査が終了すれば、それぞれの目的に沿って事業が行われ、貴重な遺跡はその姿を失います。このような状況の中で、三重県教育委員会では、文化財保護行政の立場から、それぞれの事業予定地内の文化財の確認及び保護に努めておりますが、現状保存困難な部分については、発掘調査を実施し、記録保存することとしております。

ここに調査結果を報告する東海道遺跡は、1988（昭和63）年に磯部大王自転車道整備事業に伴い第1次調査が実施されており、今回、この自転車道に並行する主要地方道磯部大王線県単道路改良事業に伴い第2次調査が実施されたものであります。

こうして記録保存された貴重な文化財を後世に伝え、今後の文化向上の一助と為すことが、重大な責務であると痛感しております。

なお、調査にあたっては、県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会並びに同町建設課をはじめ、地元の多くの方々から惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら、記して深く感謝の意を表します。

1997（平成9）年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村敏夫

例　　言

1. 本書は三重県教育委員会が、主要地方道磯部大王線県単道路改良事業に伴い発掘調査を実施した志摩郡阿児町国府字下ノ東・阿し原に所在する東海道遺跡（第2次調査）の発掘調査報告書である。

2. 調査の体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

　　調査第一課 主事 佐藤 公

　　技師 西村美幸

3. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の者が補助した。執筆・編集は主に佐藤が行い、西村が補佐した。遺物の写真撮影は佐藤が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口 愛、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子

4. 当報告書作成にあたって、財團法人瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏より御教示頂きました。記して感謝申し上げます。

5. 調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会、阿児町建設課、並びに地元の方々からのご協力を得た。

6. 採図の方位は、全て真北で示している。（現地で磁北で測ったものを真北に換算）なお、磁針方位は西偏6°40'（平成6年、国土地理院）である。

7. 写真図版の遺物番号は実測図の番号と対応させてある。

8. 東海道遺跡（第2次調査）の遺構実測図・遺物実測図や写真等の資料及び出土遺物はすべて、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9. 本書で用いた遺構番号は、通番となっている。

また、番号の頭には、各遺構の性格により以下の略記号を付けた。

S D : 溝 S K : 上坑 S Z : 落ち込み P : ピット（小穴）

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前 言	1
II	位置と環境	4
III	調査の成果－層位と遺構－	5
IV	調査の成果－出土遺物－	12
V	結 語	19

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	遺跡周辺位置図	3
第3図	調査区位置図	4
第4図	調査区土層断面図（1）	7
第5図	調査区土層断面図（2）	8
第6図	調査区平面図（A区・B区）	9
第7図	調査区平面図（C区・D区）	10
第8図	A区 SD29胴木・杭出土状況図	11
第9図	C区 SD37胴木・杭出土状況図	12
第10図	出土木製品実測図	14
第11図	出土遺物実測図（1）	17
第12図	出土遺物実測図（2）	18
第13図	出土貨幣拓影	19

表目次

第1表	出土遺物観察表（1）	15
第2表	出土遺物観察表（2）	16

写真図版目次

図版1	阿児町国府地区航空写真	卷頭
図版2	調査区遺構、出土遺物（1）	20
図版3	出土遺物（2）	21

I 前 言

1 調査の契機

主要地方道磯部大王線県単道路改良事業（以下、「磯部大王線」）は、一般地方道安乗港線（通称安乗港バイパス）に接続する形で進められている。

これに先立つ1987（昭和62）年、磯部大王自転車道（以下、「自転車道」）が計画された際に、遺跡の有無を確認するため、県教育委員会事務局文化課が阿児町国府字東海道・一色^①の事業予定地内の分布調査を行った。その結果、遺物の散布が見られさらに試掘調査を行い、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構・遺物が認められたため、県土木部道路建設課及び志摩土木事務所と協議を行い、1988（昭和63）年9月～10月、発掘調査が実施されるに至った（以下、「第1次調査」）。

磯部大王線は、この自転車道の西側に並行する荒れ地及び町道部分に計画された。

当三重県埋蔵文化財センターでは、第1次調査の結果に加え、1994（平成6）年5月及び12月の2回に分けて、事業予定地の試掘調査を実施し、その結果に基づいて協議を行い、道路センター杭No31からNo41について、発掘調査（以下、「第2次調査」）を行うこととなった。

2 調査の経過

（1）概要

調査は、1996（平成8）年9月17日に開始し、12月4日にすべてを終了、同日、志摩土木事務所に引き渡しを行った。調査面積は1,800m²であった。

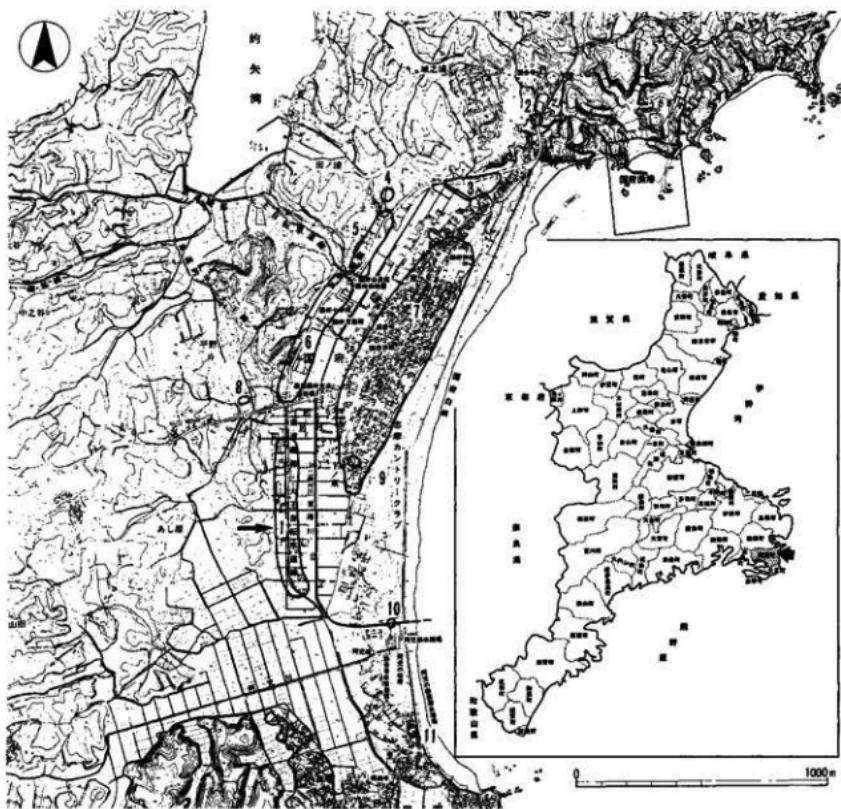
調査期間中は、例年になく秋の長雨が続き、再々にわたり、作業中断させるえない状況に追い込まれた。調査区は、おおむね海拔1～2mにあり、また長雨による地下水位の上昇もあって、検出された遺構が1週間近く水没したままということも度々であった。また、土壤が砂質であるため、水が引いて行く際、溶けるように崩れ去っていき、無残な姿となっていました。

そのような困難な状況の中で何とか調査を終了することができたのは、地元の皆様のご努力の賜物であった。ここに、作業にあたっていただいた方々のお名前を記して感謝の意を表したい。

池田忠昭、市場美和子、上野すみ子、内田美紀子、大佐静夫、大田須美子、大伴芳子、香川茂、竹本正子、永富豊子、鍋島ふさ、濱野キヨ、東邦子、東山多治助、前田秋男、松田章、宮本勝子、宮本直代、山本更生、米永宏子（敬称略・五十音順）

（2）調査日誌（抄）

- 9月20日 A・B区 重機による表土除去（台風接近のため表面の雑草除去程度）。
- 24日 B区重機による表土除去・地区坑設定。
- 26日 作業開始。
- 27日 S K 1及び4～6、S D 2、3検出。
S K 5及びS D 2は現代の攪乱か？
- 10月 2日 S D11から土師器片（鍋）多数出土。
- 7日 S D14から土師器多数。疊も10数個確認される。
- 15日 大雨のため調査区西壁の一部崩壊。
- 17日 A区の重機による表土除去・地区坑設定。天目茶碗片など遺物わずか。
- 18日 A区検出作業開始。
- 21日 S D29で桐木・杭出土。
- 22日 C区重機による表土除去・地区坑設定。中央付近で比較的大きな陶器片など多数出土。
- 30日 C区作業開始。
- 31日 S D29で桐木・杭取り上げ。
- 11月 5日 S D37から杭、桐木出土。
- 7日 C区b12グリッドより獸骨らしきものが出土する。
- 15日 C区の作業ほぼ終了。
- 18日 D区重機による表土除去・地区坑設定。A区同様遺物はほとんど無い。
- 20日 D区作業開始。
- 21日 作業完了。午後から道具片付け等。



第1図 遺跡位置図 (1:20,000) 〔阿兒町『阿兒町全図』1:10,000より〕

- 1. 東海道遺跡
- 2. 御茶子遺跡
- 3. 西殿遺跡
- 4. 国府城跡
- 5. 天神遺跡
- 6. 殿舎遺跡
- 7. 国府遺跡
- 8. 地蔵堂跡
- 9. 東海道中世墓跡
- 10. 和鏡出土地点
- 11. 甲賀遺跡

* 遺跡は国府地区周辺の中世を中心とした時期のものに限る。

30日 現地説明会実施。（約40人参加）

平成8年12月25日付け教文第18-75号（県教育通

12月 4日 引き渡し。

知）

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

- ・文化財保護法第57条の3 第1項（文化庁長官あて）
平成8年9月3日付け道建第1134号（県知事通知）
- ・文化財保護法第98条の2 第1項（文化庁長官あて）
平成8年8月16日付け教文第1804号（県教育通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鳥羽警察署長あて）

〔註〕

- (1) 現在、「宇東海道」・「宇一色」は行政的に存在しない。

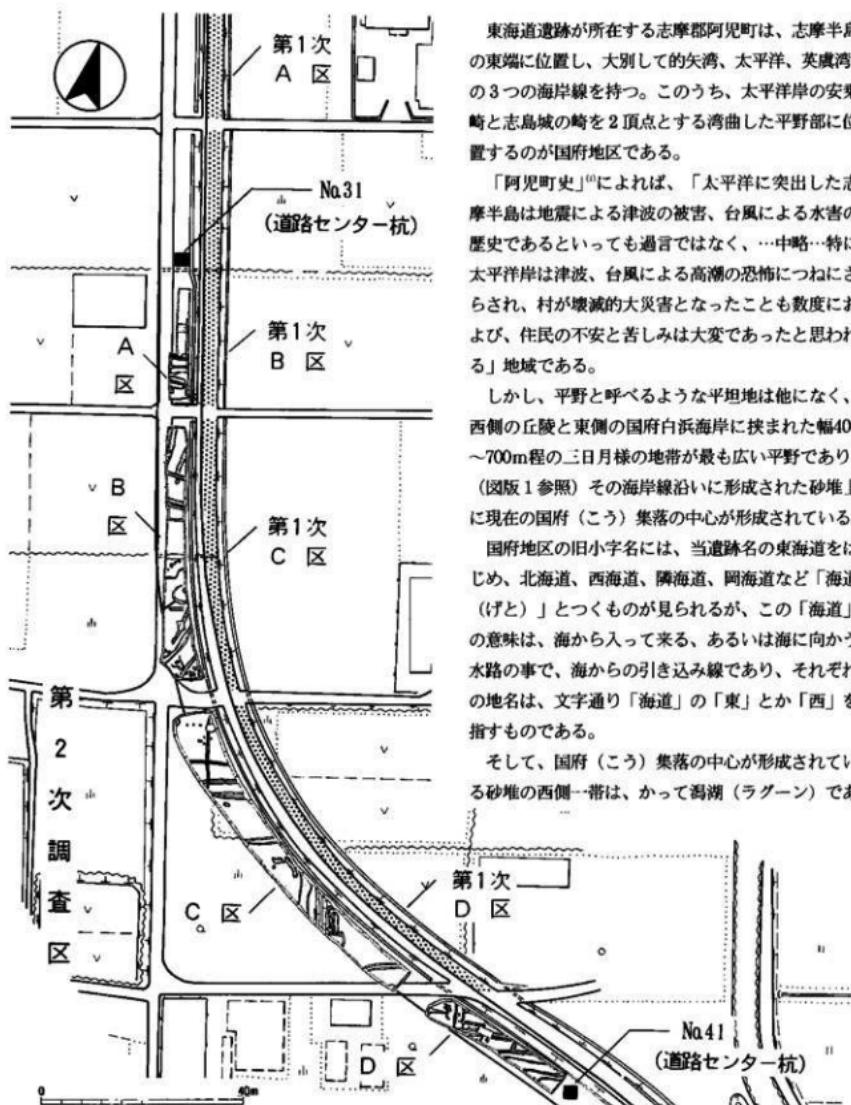
小字の統廃合により、「宇東海道」は「字下ノ東」に、「宇一色」は「字阿し原」となっている。

（1988年2月26日官報告示）



第2図 遺跡周辺位置図 (1 : 5,000)

II 位置と環境



東海道遺跡が所在する志摩郡阿児町は、志摩半島の東端に位置し、大別して的矢湾、太平洋、英虞湾、の3つの海岸線を持つ。このうち、太平洋岸の安乗崎と志島城の崎を2頂点とする湾曲した平野部に位置するのが国府地区である。

「阿児町史」¹⁰⁾によれば、「太平洋に突出した志摩半島は地震による津波の被害、台風による水害の歴史であるといつても過言ではなく、…中略…特に太平洋岸は津波、台風による高潮の恐怖につねにさらされ、村が壊滅的大災害となったことも數度におよび、住民の不安と苦しみは大変であったと思われる」地域である。

しかし、平野と呼べるような平坦地は他なく、西側の丘陵と東側の国府白浜海岸に挟まれた幅400～700m程の三日月様の地帯が最も広い平野であり、(図版1参照)その海岸線沿いに形成された砂堆上に現在の国府(こう)集落の中心が形成されている。

国府地区的旧小字名には、当遺跡名の東海道をはじめ、北海道、西海道、隣海道、岡海道など「海道(げど)」とつくものが見られるが、この「海道」の意味は、海から入って来る、あるいは海に向かう水路の事で、海からの引き込み線であり、それぞれの地名は、文字通り「海道」の「東」とか「西」を指すものである。

そして、国府(こう)集落の中心が形成されている砂堆の西側一帯は、かって潟湖(ラグーン)であ

第3図 調査区位置図 (1 : 1,000)

ったものが、海岸砂丘形成の過程で次第に小さくなっていた後背湿地と考えられる¹⁰。つまり、潟湖（ラグーン）こそがまさに「海道」そのものであり¹¹、当東海道遺跡は地理的には後背湿地上に存在すると見られる。ただ、現在の地形図から考えると、遺跡南西部については、後背湿地成立よりも早い時期に成立した陸繫砂州（トンボロ）上にかかるという見方もある¹²。

この地域では、当遺跡の他に、殿畠遺跡（第1図6）・天神遺跡（同5）・西殿遺跡（同3）の発掘調査が実施されており、徐々に周辺の歴史的環境が解明されてきている¹³。

その概要を見ると、殿畠遺跡では掘立柱建物、土坑、溝など居住地としての性格を持つ遺構が検出されており、天神遺跡でも同様である。また西殿遺跡では同様の遺構の他、26体の人骨が確認されている。時代的には、いずれも中世（鎌倉～室町時代）をその中心としている（西殿遺跡は古墳時代の土坑も見られる）。なお、殿畠遺跡・天神遺跡は海拔2.5m程度（天神遺跡の方が若干低い）、西殿遺跡は海拔1.5m程度にある。

また、これらの遺跡のやや南方には東海道中世墓（第1図9）がある。

これに対し、当遺跡の現況は、海拔1～2m程度の低地で、付近一帯は田畠地となっており、耕作土は海岸に多く見られる砂質土で、貝殻が多く散布し

ている。また第1次調査の結果では、圧倒的に溝が多く、建物跡は検出されていない。そして礎群・杭列の存在から水利施設が、また小溝・隆起構造も見られることなどから、一種の食糧生産の場ではなかつたかと考えられている¹⁴。

「国府」集落一帯は、字が示すように志摩国の政府の所在を意味するものと考えられるが、現在のところ国府跡と推定される遺跡は見つかっておらず、唯一の関連施設で現存している国分寺も奈良時代の国分寺と同一と断定されるには至っていない¹⁵。このような遺跡の立地と内容をもとに、国府地区の平野部はかなり制約された地理的条件の中で、居住域・耕作域・墓域が有機的な関連をもって配置されていると分析されている¹⁶。

〔註〕

- (1) 『阿児町史』 阿児町 1977年
- (2) 伊藤裕偉『東海道遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1989年
- (3) 前掲書(2)
- (4) 津東高校教諭前川明男氏の御教示による。
- (5) ア、新田洋『殿畠遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980年
イ、中村信裕『天神遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1984年
ウ、斎藤直樹『西殿遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター 1992年
- (6) 前掲書(2)
- (7) 横村寛之他『斎宮・国府・国分寺』特別展図録 斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター 1996年
- (8) 前掲書(2)

III 調査の成果－層位と遺構－

1 調査の方法

調査区は、全長200mほどであるが、その間に車道・駐車場が何本か走っていて、農作業等で随時車が出入りしており、遮断する事ができない。そのため、残さなければならない道路を境目として、北から順にA～Dの4区を設定した。各区ごとに任意の基準点を設け、4m方眼を切り小地区を設定した。各小地区名は、北西隅を原点とし、北から南へは算用数字、西から東へはアルファベット小文字で示した。

今回の調査の際、最新の国土調査による水準点を

もとに計測した結果、A・B区の標高は1.9m前後、C・D区は1.6m前後であった。これは第1次調査での標高より1m以上高い値である。残念ながら、第1次調査時点での基準点が現存していないので確認することができなかったが、第1次調査の基準レベルが実際より低い可能性があり、第1次調査報告と第2次調査報告（本書）の数値の正確な整合を図ることができなかつた。

なお、雑草が生い茂るA・B・D区および高さ3m近い竹が密生しているC区とも、表土をパックホウにより数十cm掘削した上で、あとはすべて人力に

による掘削を行った。

2 基本層序と遺構概要

今回調査を行った地区は、基本的には砂もしくはシルトで構成された土層が認められる。

各区の層序は土層断面図（第4・5図）の通りである。各区によって若干の差異はあるものの、基本的には第I層=表土、第II層=褐色砂質シルト（包含層）、第III層=暗褐色砂質シルト、第IV層=黄褐色砂質シルトである。多くの遺構は、第III層上面で検出された。

層序はB・C区では比較的安定しているが、A・D区では不安定で、海岸部に見られるような白色砂の広がりが見られる。D区は他地区より標高が低く、地下水位が高いため、表土直下あたりから全体に湿気を帯びていた。この地がラグーンであったことは前述したが、D区は、ラグーンの一一番下手でもあり、陸地化したのが他地区より遅れたものと考えられる。

遺構の大半は溝であるが、全体的な傾向としてほぼ東西方向の溝とそれに直行するような南北方向の溝があり交じっている。ただし、時期不明の溝も多く、溝の方向性と性格（役割）の関連は残念ながら把握できていない。また、第1次調査との関連を考えての調査を行ったが、一部を除き、各遺構に対応させることは出来なかった。検出面があまり安定していないかったことも原因の一つとなろう。

以下、各区の主な遺構について述べる。

3 A区の遺構

S D 29 東西方向の幅5mほどの溝で、ほぼ平坦な底部を持つ。この底部にあたる南側法面下部で胴木と杭が見られた。全長約4.6m、根元側（東側）の直径約10cmの胴木は、比較的まっすぐな木を利用したものと思われるが、枝を払った以外には加工跡は認められない。杭は3本で、いずれも先端を鋭く加工してあり、胴木を支えるように打ち込まれている。護岸用であろう。北側法面では確認されなかった。埋土は礫・貝混灰褐色粘質シルト層で、15~16世紀の土師器が出土している。

S D 25・26・27・28 いずれも幅1~1.5m、深さ0.2m程度で、S D 29同様東西方向の溝である。埋

土は白色砂で、遺物もほとんど無く、時期及び性格は不明である。第1次調査B地区中央部で検出された土坑群と類似している。

4 B区の遺構

S D 7 幅1.5m、深さ0.3mの溝で、北東から南西方向に流れる。上層部からは比較的多量の貝殻とともに近現代の陶器が、また下層からは15~16世紀頃の土師器が多数出土している。

S D 11 幅0.5m、深さ0.1m程で、東西方向の細長い溝である。15~16世紀頃の土師器が出土している。

S D 13 幅1.2m、深さ0.2m~0.3mの東西方向の溝だが、性格・時期等を決定する遺物はない。

S D 14 幅2.8m、深さ0.2mで、S D 13に隣接しており、15~16世紀の土師器等が比較的多数出土している。また溝の底部北側法面付近で大人のこぶし大の礫が10数個かたまっていたが、護岸用の石が崩れたものであろうか。位置や礫群の出上から、第1次調査C区のS D 9の続きと考えられる。

S D 18 幅1m、深さ0.2mで東西方向である。検出面付近で近世のものかと思われるキセルが出土したのみで、他に時期を決定するような遺物はない。

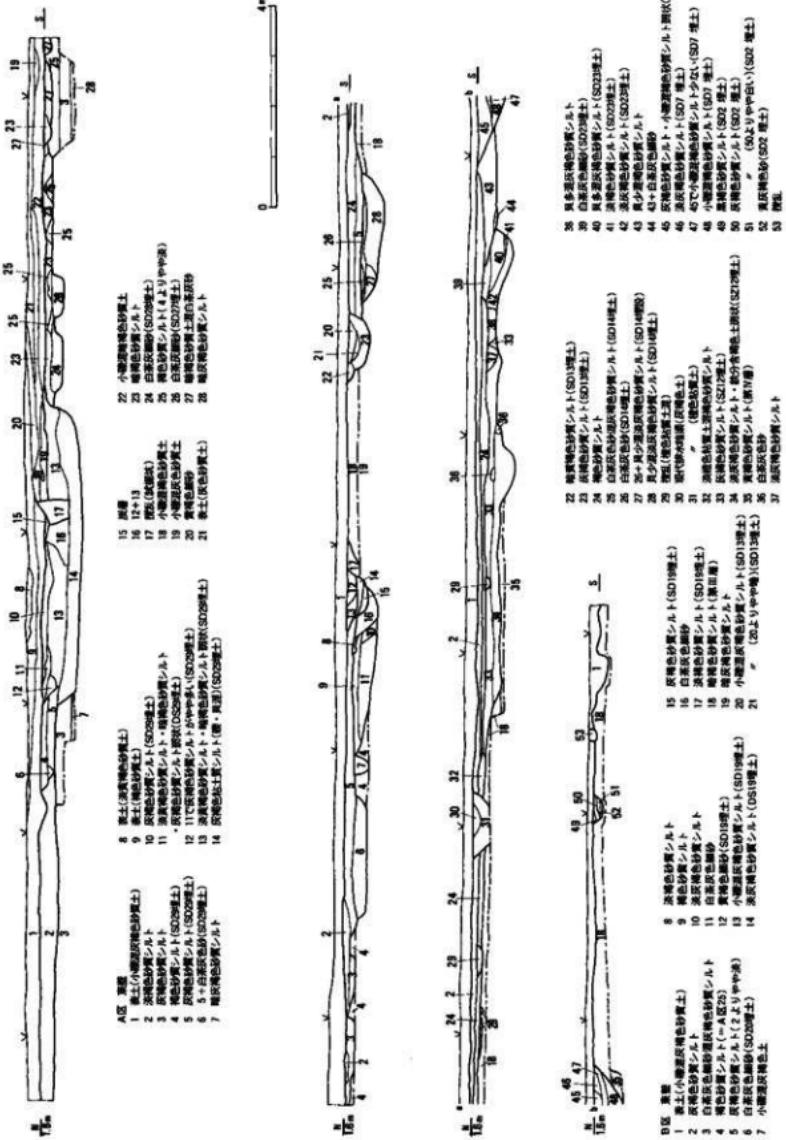
S D 20 幅0.9m、深さ0.2m程度で南北方向であるが、S D 18に直交する形で流入している。S D 18同様遺物はほとんどない。位置や方向から第1次調査B区・C区のS D 1の続きと考えられる。

S D 21 幅1.2m、深さ0.2m程度で南北方向である。埋土は白色砂で、遺物はほとんどない。

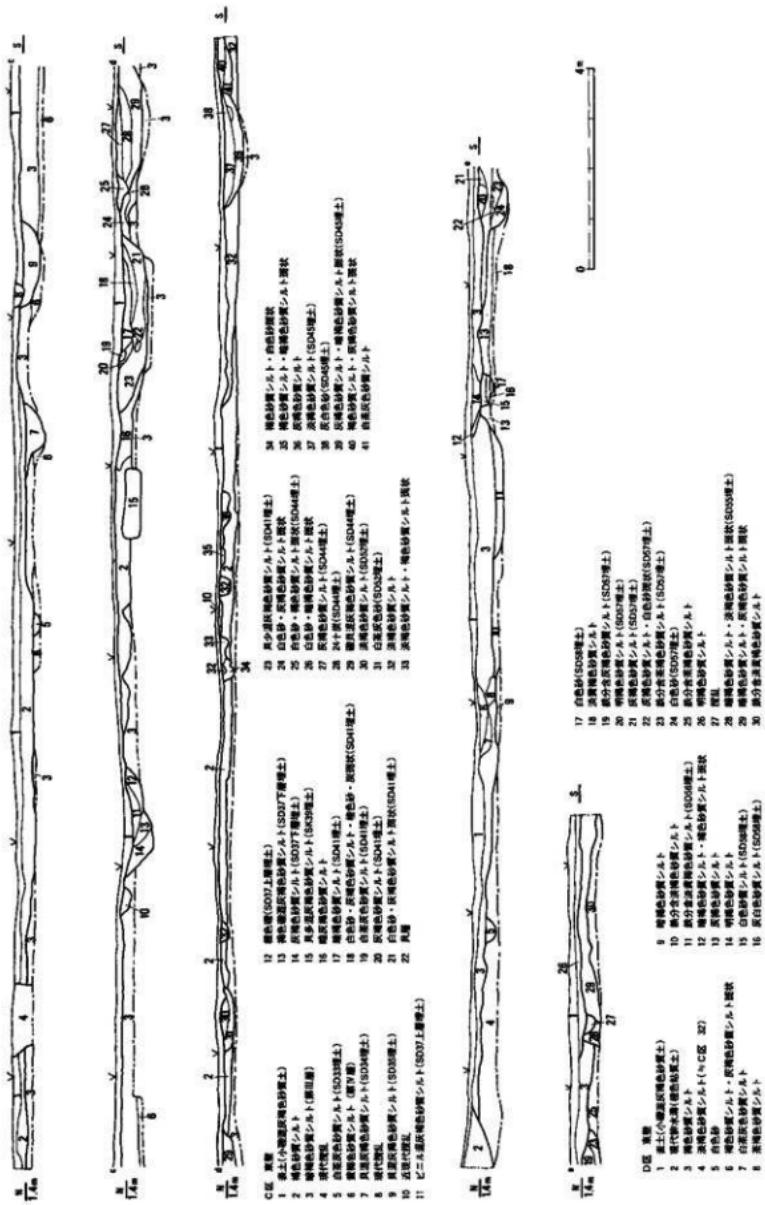
S D 23 幅1m、深さ0.2m程の溝で、S D 7に隣接し、北東から南西方向に流れる。土師器・陶器等の小片が若干出土するが、時期を決定するには至らない。

S K 8 S D 7の北側肩を切る形で広がり、調査区外にかかるので、全形は確認できない。土師器や陶器などの小片が出土しており、時期的にはS D 7と大差ないものと考えられる。

S K 10 北西の半分程がS Z 12に切り込む形で広がる。南肩は、S Z 12と同様深さ0.1m弱と浅い。15~16世紀頃の土師器や陶器片が少量出土しているが、S Z 12に関連するものとも考えられ、S K 10そのものの性格を決定するには至らない。



第4図 調査区土層断面図(1) (1 : 100)



第5図 調査区土層断面図(2) (1 : 100)

S Z 12 北側で深さ0.2m、南側で深さ0.1m弱程度の落ち込みである。15~16世紀頃の土師器鍋片や近世の陶器片が比較的多数出土している。第1次調査C区のS D10の続きである可能性がある。

S D 2 S D 2及びそれ以南の溝・土坑については、表土直下付近から切り込まれ、遺物もほとんどない。また調査区南壁にかけてビニール等が混入した貝殻が散乱しており、近~現代の擾乱と考えられる。

5 C区の遺構

S D 32 最大幅0.6m、深さ0.2m弱で南北方向の細長い溝であるが、ゴミ等の混入状況から現代のものと考えられる。

S D 33 S D 32をほぼ直交しながら横切る同程度の溝で、現代のものと考えられる。

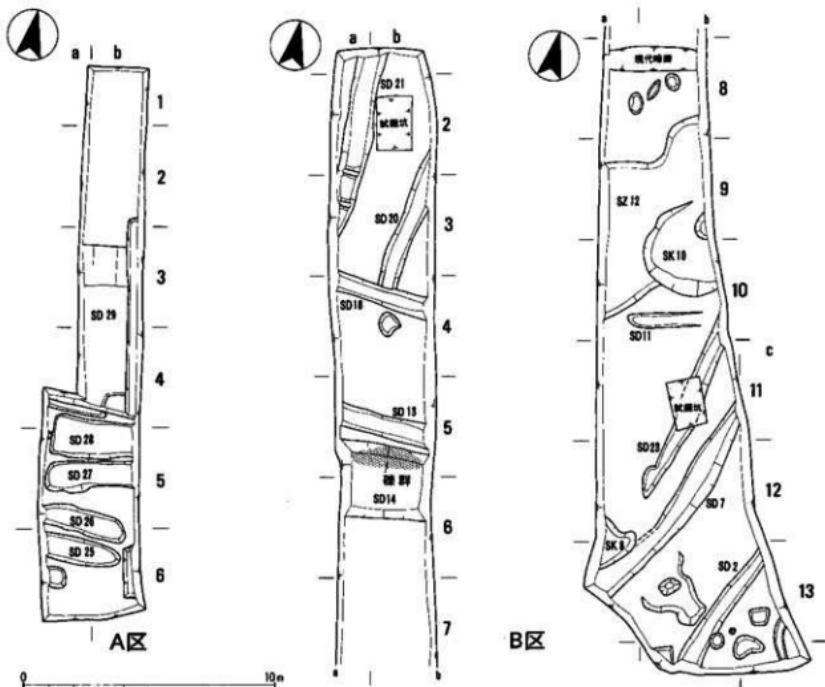
S D 34 幅1m、深さ0.2m程度の溝で、S D 32

に直交する形で切られている。大人のこぶし大の礫多数に交じって15~16世紀頃の土師器や陶器が比較的多数出土している事から同時期のものと考えられる。礫は廃棄されたように見えるが、性格不明である。

S D 35 幅1.3m、深さ0.4mほどのしっかりした溝で、東から西に流れる。上層付近からは、礫や近世陶器片などが、また下層付近からは他の溝よりも若干古い14~15世紀の土師器等が多量に出土した。

なお、S D 34出土の陶器片がS D 35出土の陶器片と接合したことから、併存した溝と考えられる。

S D 37 S D 35とほぼ同規模、同方向に走る溝である。上層部から礫に交じって近現代の陶器や廃棄物等が多量に出土した。さらに下層においては、15~16世紀頃の土師器や陶器が多量に出土した。また北側法面下部に胴木・杭がみられた。全長約2.4mの胴木の両端は、のこぎりで切ったと思われる加工



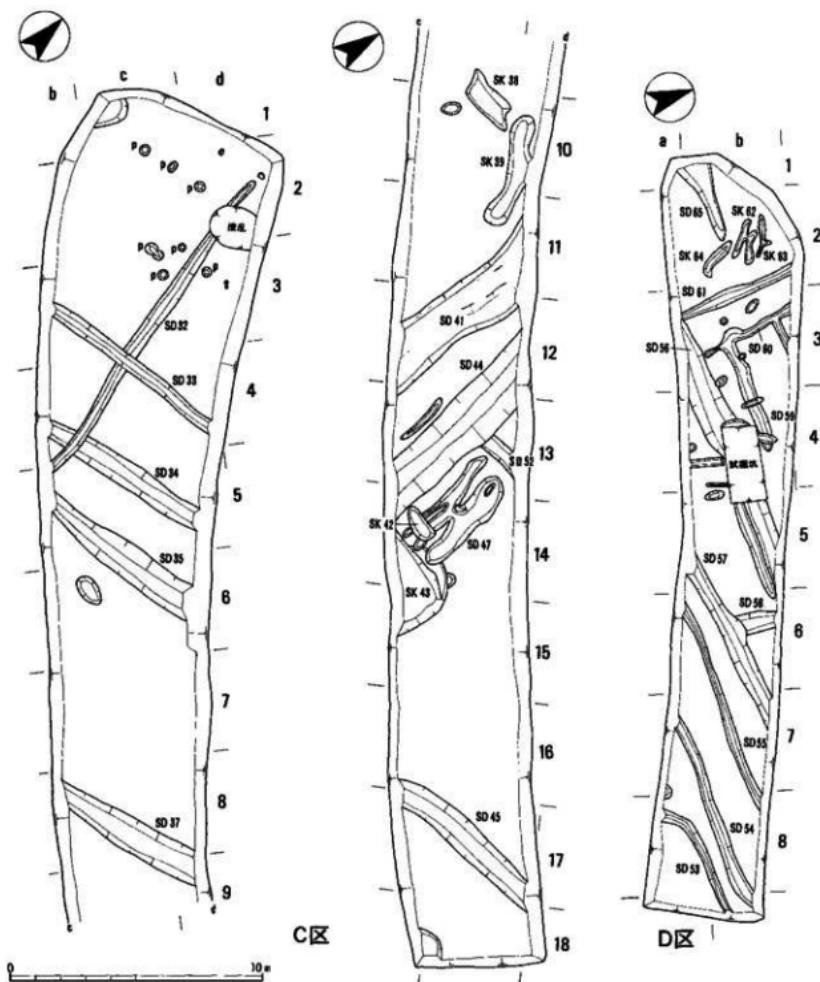
第6図 調査区平面図（A区・B区）（1：200）

跡がみられた。埋土は灰褐色砂質シルトで、遺物等から考えて、A区 S D29の胴木と同じく15～16世紀頃のものと思われる。

なお、溝中央部にも5本の杭(第10図W 8～12)が見られるが、胴木の杭よりは20cm浅い打ち込みであり、上層の遺物に関連する時期のものとも考えられる。

S D41 最大幅2.3m、深さ0.3m程で、比較的平坦な底部を持ち、北から南に流れる。検出面付近で獸骨とみられる骨片が10点ほど出土しているが、他に時期を決定するような遺物はあまりない。

S D44 S D41に並行して走る最大幅2.3m、深さ0.4m弱の溝である。15～16世紀頃の土器が比



第7図 調査区平面図 (C区・D区) (1 : 200)

較的多数出土している。また北側で護岸用に並べた石が崩れたかと思われる、大人のこぶし大の礫が10数個見られた。

S D45 幅1.1m、深さ0.2m程であるが白色砂を埋土とする遺構で遺物もほとんどなく、時期を決定するに至らない。

S D47 土坑とも考えられる、深さ0.2mほどの白色砂を埋土とする遺構である。遺物もほとんどなく、自然の水溜まりとも考えられる。

S K38 深さ0.2m弱で少量の貝殻を含む白色砂を埋土とする。時期を決定するような遺物はない。

S K39 東部が調査区外にかかり全形は確認できないが、深さ0.4m程で、サザエや蛤など大量の貝殻と共に15~16世紀頃の土師器が出土した。いわゆる「貝塚」的なゴミ捨て場とも考えられる。

S K42 S D47を切る長さ1.4m、幅0.7m、深さ約0.2mの土坑で近世の土器が若干出土している。

S K43 西部が調査区外にかかり全形は確認できないが、深さ0.3m程で、15~16世紀頃の土師器が比較的多数出土した。また表土直下付近からS D41と同様の獸骨と思われる骨片を數点確認した。

ピット 調査区北端付近に直径0.4m程度のピットを数カ所検出した。深さは0.1m程度である。建

物としてはまとまらなかった。

6 D区の遺構

S D53・54・55 いずれも東西方向で幅0.4m、深さ0.1m程度であるが、遺物は皆無に近く、性格及び時期を決定できない。

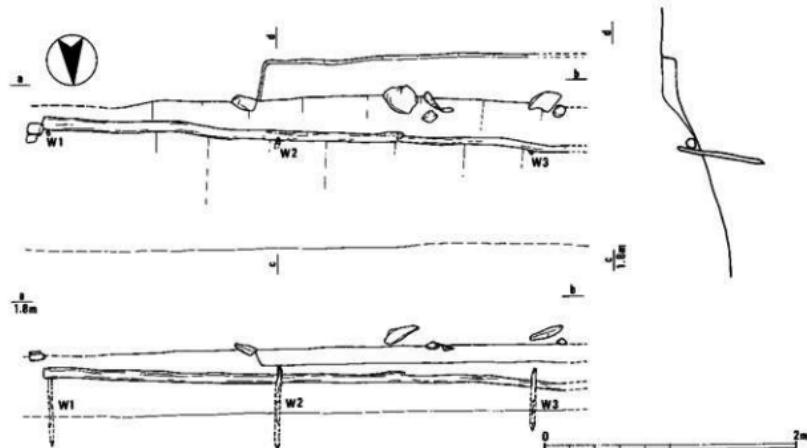
S D56 幅1.6m、深さ0.3m弱で、D区の遺構としては比較的しっかりと東から西に流れるが、やはり性格及び時期を決定するような遺物はない。

S D57・58 幅0.9m、深さ0.2m程で東西方向のS D57に、幅0.9m、深さ0.2m弱で南北方向のS D58が直交に近い形で合流しているようにみられるが、性格その他を語るような遺物はない。

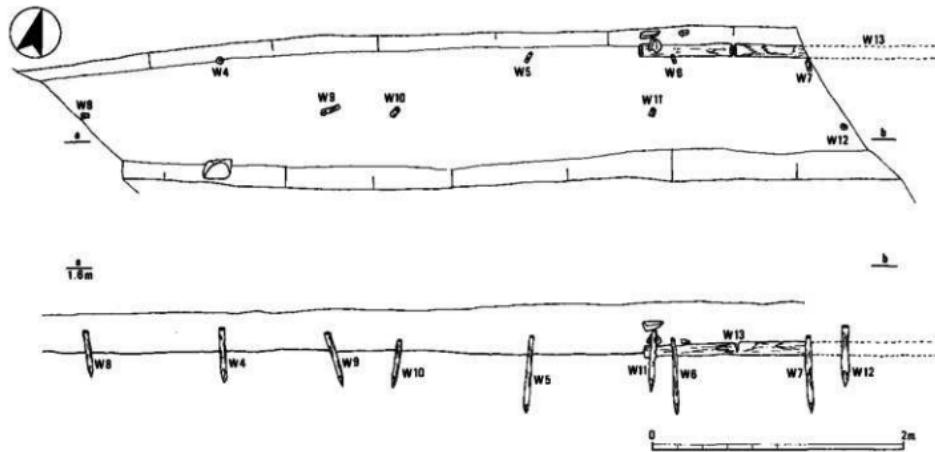
S D59・60 遺物がほとんどなく、性格・時期等不明である。

S D61・65・S K62・63・64 いずれも、深さ0.1m弱で遺物も皆無に近い。自然の溝や水溜まりであろうか。

D区は、検出面付近で少量の上器片や近現代（昭和の戦中ないし戦後間もない頃）と思われる化粧品の瓶が見つかる程度であり、全体的に常時生活するには適さない、水気の多い時期が続いてきたものと思われる。



第8図 A区 SD29桐木・杭出土状況図 (1:40)



第9図 C区 S D37桐木・杭出土状況図 (1 : 40)

IV 調査の成果－出土遺物－

今回の調査により出土した遺物は、整理箱で20箱ほどであった。その内訳は、大部分が土器で、他には若干の金属製品、木製品、石製品が見られる程度である。また完全な形の物は、後述する上鍤や輸入銭などごく少数で、一部の陶器片を除くと大半は小片であり、器種や時期決定の困難な物であった。また、遺構の大半が溝であることから、遺物には混入が考えられ、時期を確定しにくい傾向がある。以下主な遺物について遺構ごとに述べる。編年基準の出典については最後に一括して掲載する。なお、()内の数字は、第11・12図の遺物の番号と対応する。

1. A区の遺物

S D29 (1) III章でのべたように、15~16世紀の土師器片と桐木及び杭が見られる。陶器碗 (1) はケズリ出しの高台で灰釉がかかる。一筋のみ見られる文様は鉄絵と考えられる。近世美濃産小椀か。木製品は杭 (第10図 W1~3) が出土している。

2. B区の遺物

S D7 (2~7) 土師器鍋 (4) は器壁がやや厚めで、口縁部は短く、端部が内側に折り返されている。12世紀半ば~後半と見られ、今回の調査において出土した最も古い時期の土師器である。土師器羽釜 (5) は口縁部は内湾し、端部が外側に折り返されて面を持つ。陶器捏鉢 (6) は常滑産で、口縁端部の平坦面がやや広く、器壁も体下部から口縁部に向て厚くなっていく。16世紀半ばのものであろう。磁器碗 (2) は染付による文様が見られる。陶器大皿 (7) は常滑産で、自證院遺跡編年のB類に相当する18世紀前半のものである。近世と思われる陶器大皿 (7) は今回の調査で出土した陶器の中で唯一の九州産 (唐津系) と見られる。

S D11 (8~10) 土師器鍋 (8~10) は口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。いずれも15世紀後半のものと思われる。

S D14 (11~22) 土師器鍋 (16) は口縁端部が上方に突出し、端部外側に面を有する。同 (17) は

口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。同(18)は口縁端部が内側に折り返されているが、残存している端部外側はヨコナデが2回行われた結果、わずかであるが段差が生じて上下2面を有するように見える。また土師器羽釜(19)は口縁部にかけて内湾しているとみられる。これらの土師器はいずれも15世紀後半から16世紀中葉のものであろう。また、土師器小皿(15)は残存部で確認する限りは、器高0.8cm、端部がわずかに内に反する程度の薄いものである。陶器碗(11)は古瀬戸後期15世紀半ば頃の平碗である。陶器皿(12)は瀬戸産の輪禪皿で17世紀後半から18世紀初頭にかけてのものである。磁器碗(13~14)はいずれも青磁である。土鍤は、球形に近い紡錘形(20)と細長い紡錘形(21・22)があり、いずれも土師質である。

S D 18 (23) 青銅製のキセル(23)が検出面付近で見つかっているが、他に時期を決定する遺物がないので、近世ないし近代の遺構であろう。なお、(23)の内面には木質様の薄片が付着している。

S D 23 (24) 陶器碗(24)は瀬戸美濃産の天目茶碗で16世紀後半のものであろう。

S K 8 若干の土師器片が出土しているが、S D 7と大差ない時代のものと思われる。

S K 10 (25) 土師器鍋(25)は口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。15世紀後半のものであろう。

S Z 12 (26~27) 土師器皿(26)は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデされている。他に土師器鍋の小片も出土している。磁器碗(27)は青磁である。この他近世のものと思われる陶器片も若干出土している。

3 C・D区の遺物

S D 34 (28~32) 土師器鍋(28~29)はいずれも15世紀後半のもので、口縁端部が上方に突出し、端部外側に面を有する。土師器羽釜(30)は口縁部にかけて内湾していると見られ、16世紀代のものと思われる。陶器摺鉢(31)は内面底部まで摺目が見られる(4本/cm)。常滑産で、やはり16世紀代のものと思われる。陶器壺(32)はS D 34から出土した1破片が、S D 35から出土した2破片と接合され

たもので、15世紀半の常滑産であろう。

S D 35 (33~41) 上層器鍋(33~34)は口縁端部が内側に折り返されるが、端部外側に面を有しない型である。前者が14世紀後半から15世紀頃、後者が15世紀前半に属すると思われる。土師器羽釜(35)は口縁部が残っていないため特徴を捉えにくいが、(30)と同様のものと思われる。土鍤(36)は土師質の円筒形である。陶器碗(37)は尾張型の山茶碗で、13~14世紀頃のものであろう。陶器鉢(38)は常滑産の片口鉢と推定される15世紀後半のもの、同(39)は15世紀半ばのもので、摺目はないが瀬戸美濃産の摺鉢と推定される。陶器壺(40)は常滑産であるが底部のみで時期は特定しにくい。陶器壺(41)は古瀬戸後期で15世紀後半のものと思われる。

S D 37 上層から近世の陶器片が、また下層からは15~16世紀の土師器片が出土している。木製品としては、胴木(第10図 W13)、杭(同 W4~12)が出土している。

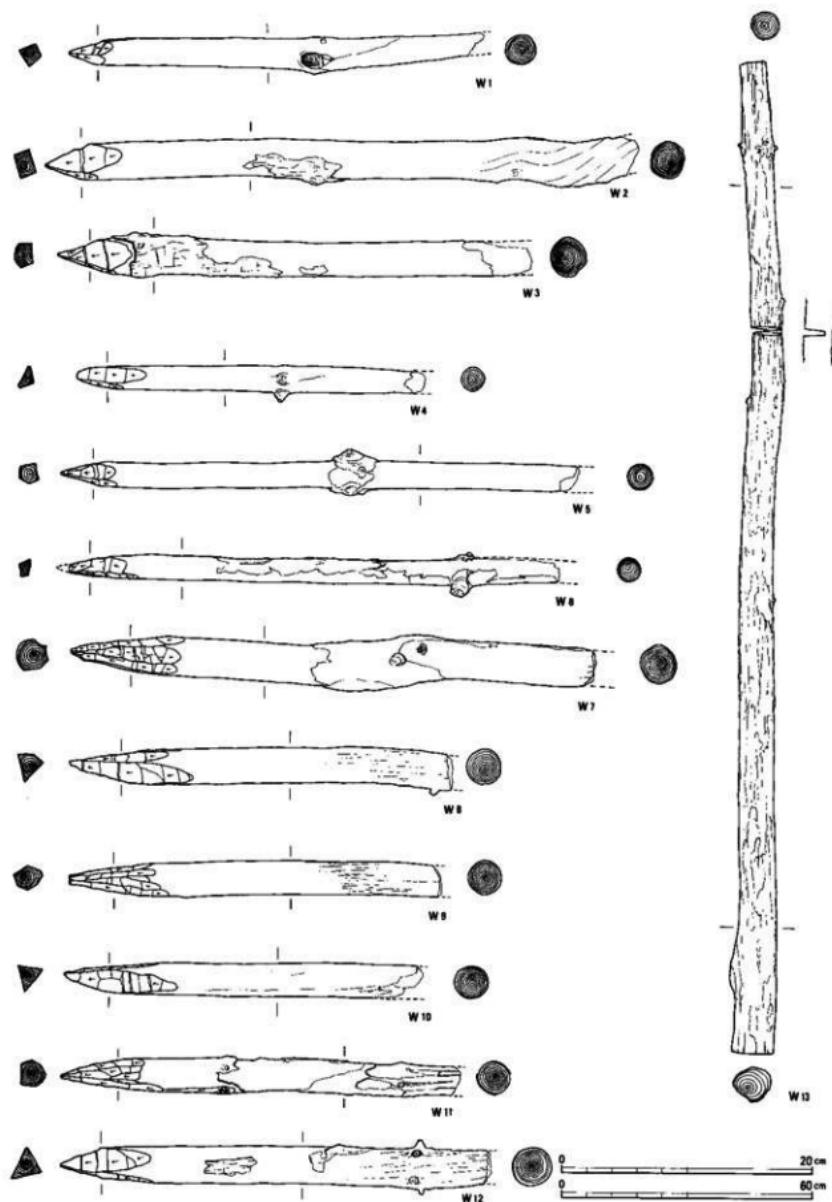
S D 44 (42~46) 陶器碗(42)は(37)と同様の山茶碗と思われる。陶器壺(43)は常滑産で16世紀半ばにおさまるものであろう。陶器鉢(44)は常滑産と思われるが、口縁端部外側がわずかに内反するものの、面を持つまでには至らない。土鍤(45)は土師質の紡錘形である。瓦(46)は三ツ巴の軒丸で、珠文が大きくやや潰れた感じで広がる事から近世半ば頃かと推定される。

S D 54 (47) 陶器壺(47)は口縁端部がわずかに外反している。壺とも考えられる。常滑産で近世のものか。

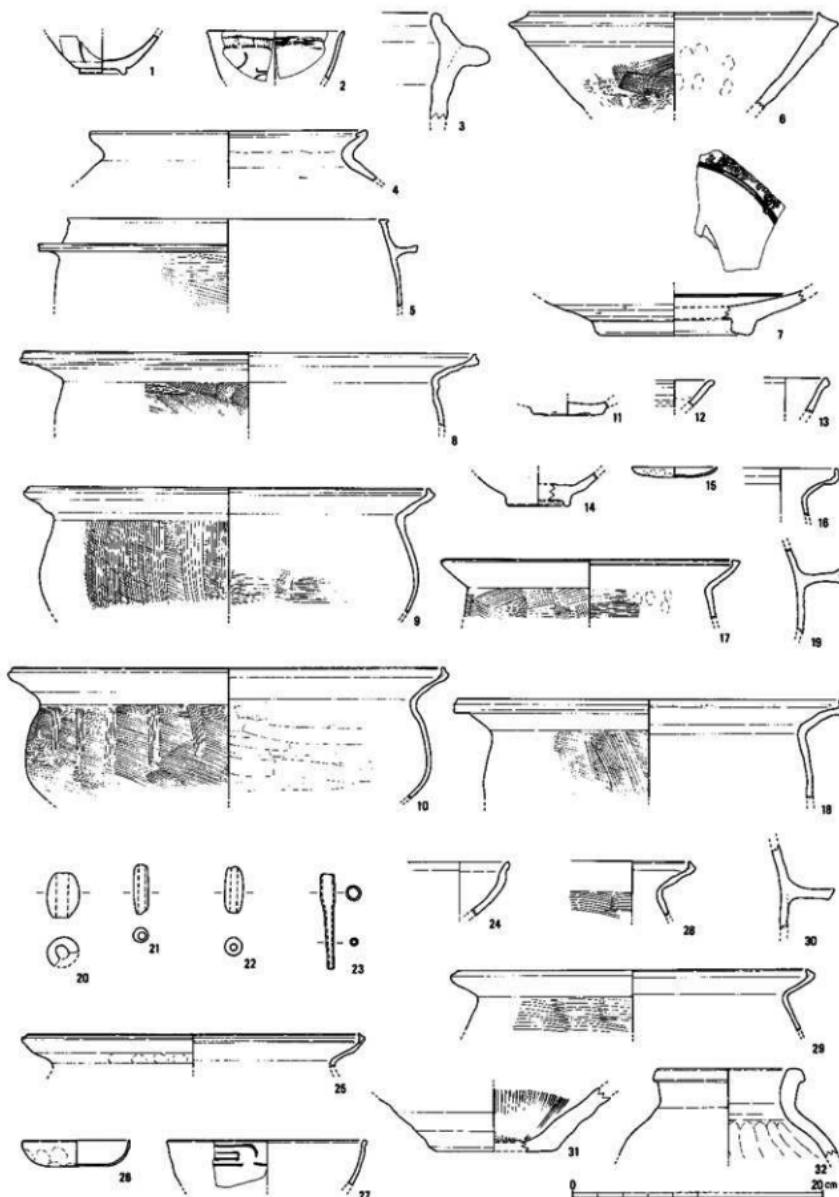
S K 39 (48) 陶器平碗(48)は内面はすべて釉がかかっているが、外面の底部側半分程は無釉である。瀬戸産で15世紀後半のものと思われる。ただし、混入品である可能性が強い。

S K 42 (49~50) 陶器皿(49)は瀬戸産の志野丸皿で17世紀後半のものと思われる。陶器鉢(50)は常滑産で、内面が平滑なのは使用による摩耗と見られ、捏鉢かと思われる。ただし、底部のみなので時期は特定しにくい。

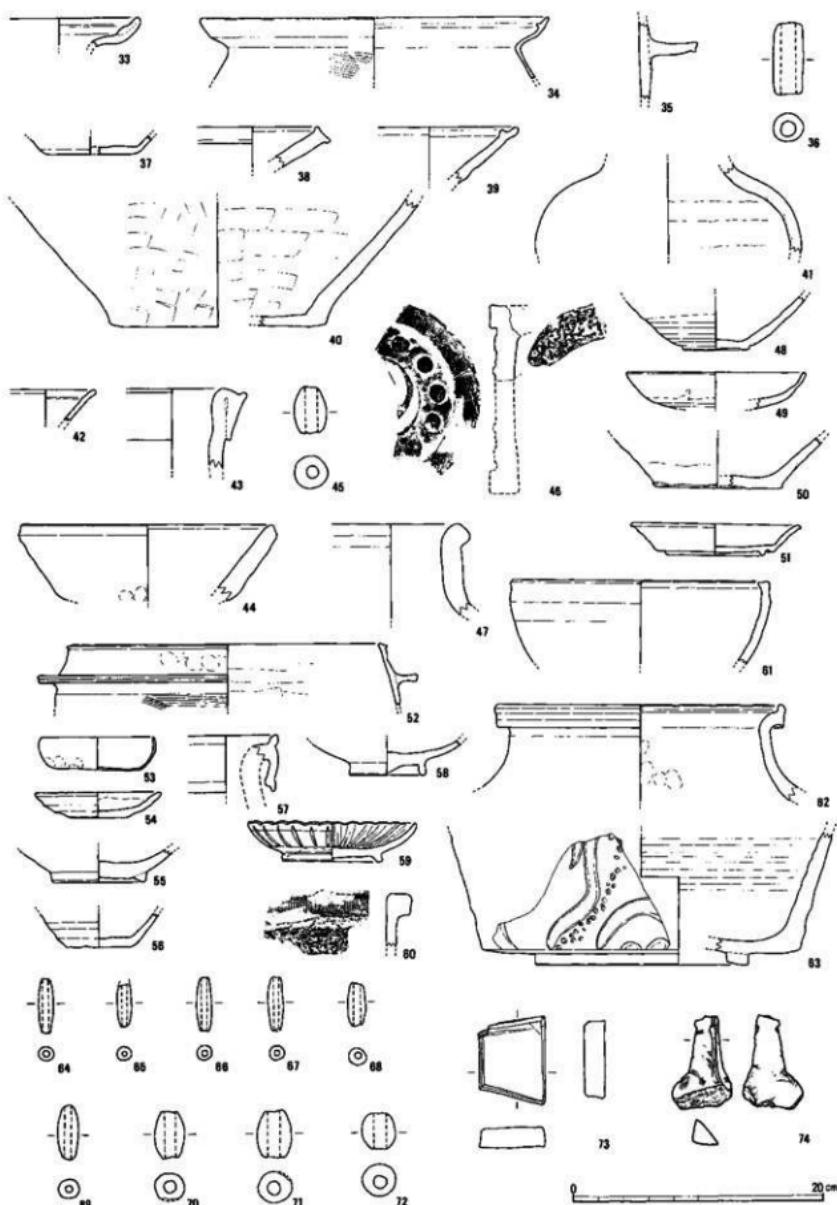
S K 43 (51) 陶器皿(51)は、瀬戸美濃産の稜皿で16世紀半ばのものと思われる。



第10図 出土木製品実測図 (1 : 4、W13のみ1 : 12)



第11図 出土遺物実測図(1) (1 : 4)

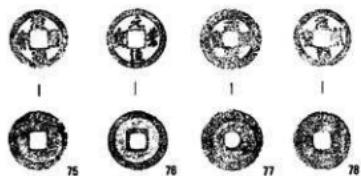


第12図 出土遺物実測図(2) (1 : 4)

た時期的にも近現代と思われる物で図示していない。銅製はいわゆる輸入銭で、第13図左から、元豊通寶（出土：B区包含層）、同（出土：C区包含層）元祐通寶（出土：C区表土）、元符通寶（出土：C区包含層）の4枚である。

元豊通寶は1078年初鋤、元祐通寶は1086年初鋤、元符通寶は1098年初鋤、いずれも北宋時代である。

第13図 出土貨幣拓影（1：2）



〔注〕土器の編年については、以下の資料による。

<土師器>

- ・伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要第1号』 三重県埋蔵文化財センター 1992年

- ・伊藤裕偉「岩出地区内遺跡群発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター 1996年

<陶 器>

- ・瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要Ⅵ～Ⅷ』 1987～1989年
 - ・赤羽一郎、中野晴久「生産地における編年について」『シンポジウム「中世常滑焼をとおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1996年
 - ・藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」『シンポジウム「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通」資料集』瀬戸市埋蔵文化財センター 1996年
 - ・自證院遺跡調査団『自證院遺跡中間調査報告』 1985年
 - ・中野晴久「近世常滑焼における窯の編年研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』 常滑市民俗資料館 1986年
 - ・共同研究「中世土器の生産と流通」『研究紀要第3号』 三重県埋蔵文化財センター 1994年
- なお、三重県埋蔵文化財センター技師の伊藤裕偉、日榮智子の両氏には何かと御教示賜った。

V 結 語

今回の調査においては、C区北端で若干のピット群が見られただけで、建物跡は検出されなかった。

現地の土層は、前述したように海岸特有の砂質であり、居住域としてふさわしい立地条件になりえなかっただろう。

しかし、全く人が立ち入らない地域かというとそうでもない。単独の破片が多く、接合復元できるものは少ないものの鍋・皿・甕などが多数出土している状況から見て、大いに生活との関連を窺わせる。

農具等の出土はないが、現況等を合わせ考えると農耕が、また土鍬・貝殻の出土からは漁労が行われ

ていたことは疑いない。

つまり当遺跡は、居住域である集落に隣接する、生産活動にかかる場であると考えるのが妥当であろう。

第II章でも述べたが、その生産活動は、集落における居住そのものも含めて、非常な困難を伴う「水との戦いの歴史」であった。

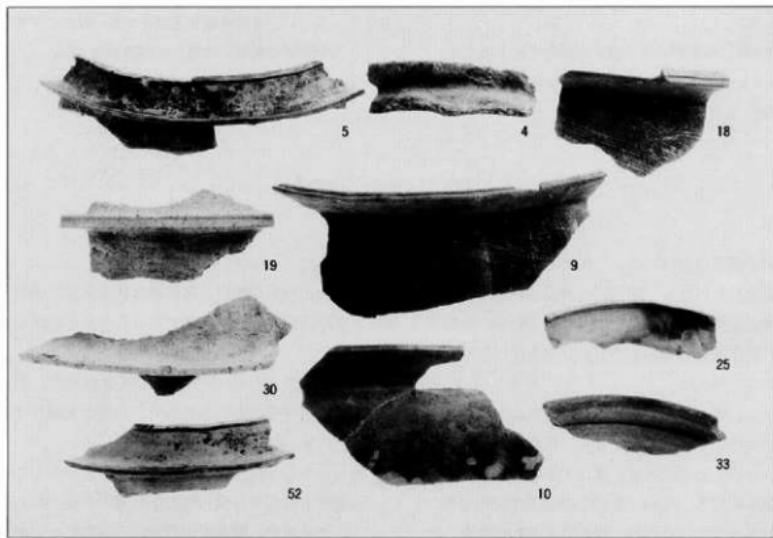
しかしながら、ダメージを受けながらもこの地を離れる事なく、限られた平野部を有機的に利用してきた結果が、現在の国府地区の存在につながっているのである。



S D 35発掘途中（南から）

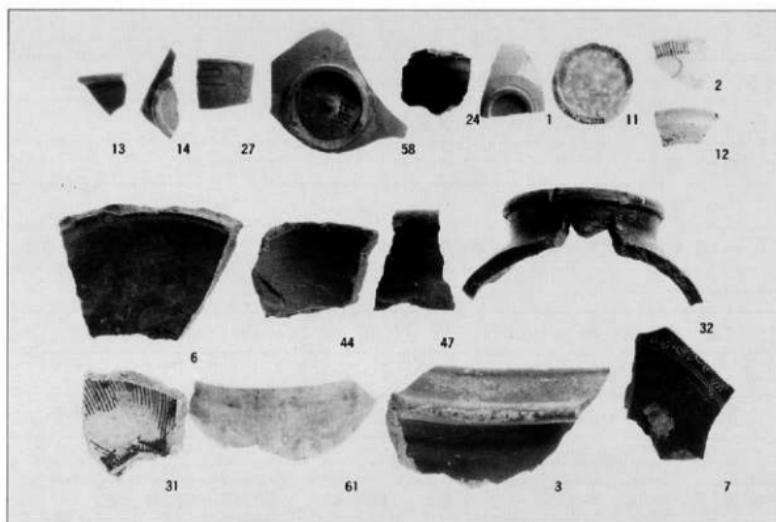


S D 37桐木・出土状況（西から）

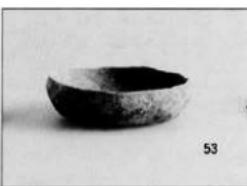
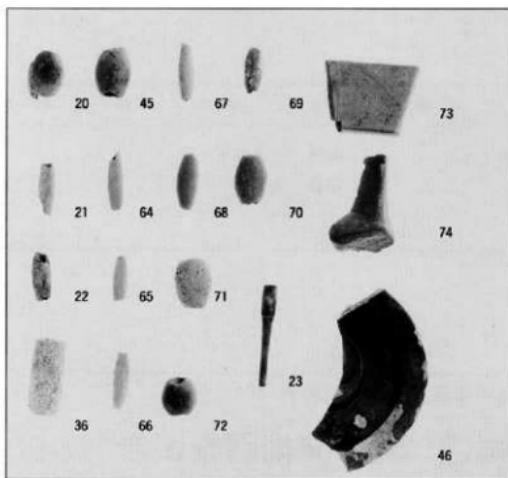


土師器 鍋・羽釜

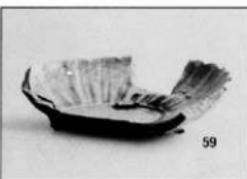
図版2 調査区遺構、出土遺物(1)



陶器・磁器



土器器 盆



陶器 稜皿

図版3 出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ひがしげと いせき (だい2じ) はっくつちょうさほうこく							
書名	東海道遺跡(第2次)発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	161							
編著者名	佐藤公・西村美幸							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL05965-2-1732							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。 。 。 ° ° °	東経 。 。 。 ° ° °	調査 期間 19960917 19961204	調査 面積m ² 1,800	調査原因	
ひがしげといせき 東海道遺跡	しまさんあごちょうこう 志摩郡阿児町国府 あぐしのひがしあしほら 字下ノ東・阿じ原	24524 123	34° 19' 33"	136° 52' 32"			主要地方道礎部 大王線県単道路 改良事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東海道遺跡	散布地	中世 近世	溝・土坑	陶器・土師器・土鍤・ 銅錢・加工木				

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 161

東海道遺跡(第2次)発掘調査報告

1997. 3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 有限会社 第一プリント社